



# 小田原史談

号 外  
発行所 小田原史談会  
小田原市南町 2-3-21

永年にわたり、本会の会長として、会の発展を支えられてきた、中野敬次郎先生が、去る今月の十二日午前十時五十三分、白血病のため、入院先の小田原市立病院で亡くなられた。享年八十三歳。

先生は、去る二月六日、小田原市役所大会議室で開かれた、第三十五回神奈川文化賞受賞記念祝賀会で、「今後も永く小田原のため

に尽したい」と、挨拶されたが、その数日後、体調を崩され、市立病院に入院されました。

先生は、連日熱が続く病床にあっても、史跡めぐりや会報の原稿を気にされ、春までには回復したいというお気持のようでしたが、このような訃報に接するとは誠に惜しみても余りある想いです。

謹んで御冥福をお祈りします。

## 会長 中野敬次郎先生

### 逝去さる



城ヶ島白秋詩碑前にて

# 辞 吊

本日ここに神奈川県文化賞受賞者故中野敬次郎先生の葬儀が執り行われるにあたり謹んでお別れのことばを申し上げます。

中野先生は長年にわたる文化財保護及び郷土史の研究に尽されたご功績により昨春秋栄えある神奈川県文化賞をお受けになりました。その祝賀会が先月行われましたがその時は奥様とご一緒にとても元気なお姿でご出席され先生を慕う大勢の人たちの祝福に目を細めておられました。その数日後にあなた

が身体の不調を訴え市立病院に入院されたことを聞き早速お見舞いに伺いましたところ比較的お元氣な様子に私も安心しておりましたのにこのように早くお別れの時が来ようとは思ってもありませんでした。人生の無常をつくづくと感じるとともに看護を尽くされた奥様はじめ御家族の御心中お悲しみを御推察申し上げる時お慰めの言葉もございません。今ここに、先生の残された御功績を振り返ってみますと小田原中学校在職当時から教鞭を

とるかたわら小田原地方史の調査研究に取り組まれ、今日の本市文化財保護行政の基礎を築かれた昭和二十六年からは本市教育委員会の社会教育課長として郷土文化館の開設、尊徳記念館の建設、尊徳生家の移転復元、小田原城整備、石垣山の史跡指定等、本市の文化財保護行政の推進に力を注がれました。また、あなたは本市の文化団体の育成にも御尽力され特に昭和四十四年に創設されました小田原市文化団体連絡協議会の会長として、

各文化団体を指導育成され、市民文化祭の開催等とおして、本市の文化の振興と発展に大きな功績を残されたのであります。その他小田原市の各種委員会委員をはじめ多くの役職をつとめられており全てを数えあげることができません。今までの先生の地道な御努力と御功績に対し、昨秋呉知事から神奈川県文化賞が贈られました。

これは小田原市民はもとより七百五十万県民から贈られたものであります。この場合は、教養であり、社会的次元では、文化と申します。長きに渡る先生の小田原市民に残された心の功績は、誠に多大でございます。

先生の長年の御功績に対し感謝の気持ちをこめてここに文化功労者として追彰させていただいた次第であります。小田原市は東西における文化・産業・経済・交通の中心都市として発展をつづけてまいりましたが、あなたが生涯をかけて取り組まれた文化財保護活動の一つ一つが本市文化の発展の原動力になっているといっても過言ではないと存じます。今本市は二十一世紀に向け、歴史と文化のかおるまちづくりをめ

ざして努力をいたしております。この時にあたりあなたを失ったことは誠に大きな損失であり残念でなりません。中野先生本当にありがとうございました。今は大にひたすらあなたの御冥福をお祈りするばかりでございます。どうぞやすらかにお眠り下さい。さようなら。昭和六十二年三月十四日 小田原市長 山橋 敬一郎

共々小田原の新能を、小田原城新能と名付け、小田原城主の式楽を催したことに、間違いないかたことを思い、喜びがこみあげてきました。そして、同時にこの城再建の功労者が、我等の会長中野先生であることを想い起して、更に嬉しさが一ぱいになりました。

里福岡へ持ち去られ、淋しいあの時、市にお願いして玄庵の茶室をここに移して、華かな茶会を催したのは、先生でした。昨年の新能は、観世元昭先生一門の船辨慶でした。日本能楽協会会長の元昭先生は、観覧席の一番後ろに立たれて、「権野さん、きれいだね、素晴らしいね」と申されまして。私は、「静かですが」と申しましたら、「そうじゃないお城だよ、小田原のお城だよ」と申されました。私は、その時、先生

山城中城を見せてやろうと申され、この春、私の車で予定して居りましたのに、先生は、約束を果さず、他界なさいました。

先生、あの世への旅立ちを、歎く者は、私のみではありません。連合会の諸先生のすべてが、それぞれの想い出を秘めておいて、今は先生の安らかな御冥福を御祈り申し上げます。弔辞といたします。昭和六十二年三月十四日 小田原市文化団体連絡協議会 副会長 権野 泰

三月十二日、先生御逝去の報に接し、あまりの突然に、唯茫然とするばかりでした。生者必滅とは申せ、奥様の手厚い御看護の甲斐もなく、この世を去られて残り私達の落胆は、一方ならぬものがござります。

国と県との、十数回に渡る、中野先生の文化表彰は、誠に多岐をきわめています。先生の八十三年の御生涯は、全部文化と共にあったと、申し上げても、過言ではないでしょう。表彰の数々を、今御

同い致す時、如何にも華かな人生を想像申し上げるべきでございます。けれども、戦後、都市化の目ざましい小田原市にあって、物と同様に、心の豊かさを求める時代に「開発」か「文化」か、そのはげしい闘いの渦の中に一方ならぬ先生の御心労が、日夜限られぬ程に、続いたことを、今我々は、想い起さなければなりません。

私が先生に親しく御指導を頂いたのは、先生から文化団体連絡協議会の副会長を仰せつかったその日からの短い間でございますけれども、今、振り返って、先生を追慕してやまない数々が、脳裏をかすめます。松永記念館の宝物が松永さんの逝去後、郷

共々小田原の新能を、小田原城新能と名付け、小田原城主の式楽を催したことに、間違いないかたことを思い、喜びがこみあげてきました。そして、同時にこの城再建の功労者が、我等の会長中野先生であることを想い起して、更に嬉しさが一ぱいになりました。

山城中城を見せてやろうと申され、この春、私の車で予定して居りましたのに、先生は、約束を果さず、他界なさいました。

国と県との、十数回に渡る、中野先生の文化表彰は、誠に多岐をきわめています。先生の八十三年の御生涯は、全部文化と共にあったと、申し上げても、過言ではないでしょう。表彰の数々を、今御

同い致す時、如何にも華かな人生を想像申し上げるべきでございます。けれども、戦後、都市化の目ざましい小田原市にあって、物と同様に、心の豊かさを求める時代に「開発」か「文化」か、そのはげしい闘いの渦の中に一方ならぬ先生の御心労が、日夜限られぬ程に、続いたことを、今我々は、想い起さなければなりません。

私が先生に親しく御指導を頂いたのは、先生から文化団体連絡協議会の副会長を仰せつかったその日からの短い間でございますけれども、今、振り返って、先生を追慕してやまない数々が、脳裏をかすめます。松永記念館の宝物が松永さんの逝去後、郷

共々小田原の新能を、小田原城新能と名付け、小田原城主の式楽を催したことに、間違いないかたことを思い、喜びがこみあげてきました。そして、同時にこの城再建の功労者が、我等の会長中野先生であることを想い起して、更に嬉しさが一ぱいになりました。

山城中城を見せてやろうと申され、この春、私の車で予定して居りましたのに、先生は、約束を果さず、他界なさいました。

先生、あの世への旅立ちを、歎く者は、私のみではありません。連合会の諸先生のすべてが、それぞれの想い出を秘めておいて、今は先生の安らかな御冥福を御祈り申し上げます。弔辞といたします。昭和六十二年三月十四日 小田原市文化団体連絡協議会 副会長 権野 泰



史蹟めぐりで解説指導に当る中野先生



昭六・六・元 中野先生と山橋